

「東日本大震災と発育発達」

東京医科歯科大学 国際健康推進医学 藤原武男

胎児期の低栄養がその後の成人期の健康状態に影響を与えるとする DOHaD 仮説の理論的根拠は、俚約遺伝子仮説である。つまり、危機的な状況において、俚約遺伝子が発現し、そのために実際には危機的な状況ではなくても栄養を蓄積する方向に代謝が傾くとする説である。では、実際に危機的な状況であった場合、胎児期に低栄養であった子どもの発達、発育はどうなるのであろうか？たとえば、2011年3月11日に発災した東日本大震災といった危機的な状況において、低出生体重児で表現される胎児期に低栄養であった子どもと、そうでなかった子どもにおいて、発育・発達に差は見られるのであろうか。

我々は、東日本大震災を未就学期に体験した、岩手県・宮城県・福島県および対照群として三重県における子どもを4年間、追跡調査し、子どものメンタルヘルスに関する詳細な調査のみならず、血圧、身長・体重、握力、片足立ち、自律神経機能等についても実測してきた（ベースラインでのN=363）。具体的には、平成24年度において、震災関連トラウマの曝露状況および子どもとその保護者のメンタルヘルス等の状況を把握すべく、質問紙および児童精神科医または臨床心理士による面接でデータ収集を行った。さらに、追跡調査も質問紙、面接により構成した。子どもが直接答えることのできる質問紙は補助をつけながら実施した。追跡調査にあたり、捕捉率を上げるため、対象者に対する支援を入れながらフォローをした。具体的には、児童精神科医または心理士が参加者から話を聞き、支援を行い、さらに必要な支援が必要である場合には専門機関につなげた。さらに、誕生日カード、クリスマスカード、暑中お見舞い等を送付した。また、追跡調査の参加にあたり連携を密にした。さらに、当日風邪でキャンセルなどがあった場合は、後日あらためて調査を実施した。その結果、追跡率は約75%であった。本シンポジウムでは、その結果を報告するとともに、胎児期の低栄養とその後のトラウマ体験との交互作用の意義について考察する。